

第 1 章 京都市生物多様性プラン策定の背景

国においては、1993 年（平成 5 年）に生物多様性条約を締約し、その後「生物多様性国家戦略」が策定され、「生物多様性基本法」が制定されました。このうち、「生物多様性基本法」では、京都市をはじめとする地方自治体について、生物多様性の保全及び持続可能な利用に関する基本的な計画（生物多様性地域戦略）の策定を努力義務として求めています。

京都市では、「はばたけ未来へ！ 京プラン」（京都市基本計画）の中で「京都の自然環境を後世に伝えていくため、京都の地域特性を考慮した生物多様性の保全に向けた取組を進めていく」としており、固有生物の絶滅危惧や松枯れ・ナラ枯れ、祇園祭の粽に用いるチマキザサの減少など、自然の保全や伝統的な文化の継承を揺るがすような生物多様性に係る問題が発生する中、体系的・総合的な取組を推進していく必要があると考えています。

こうしたことを踏まえて「京都市の生物多様性保全の在り方」等についてご意見をいただくため、京都市環境審議会の下に生物多様性保全検討部会を設置しました。

この部会では、京都市の生物多様性の現状や課題などを踏まえたうえで、生物多様性の保全に向け目指すべき目標や施策の方向性などについてご意見をいただき、これらを踏まえてこの「京都市生物多様性プラン」を策定しました。

国内の動き

- 1993（平成 5）年に生物多様性条約を締約
- 生物多様性国家戦略（現在、3 回の改定を経て生物多様性国家戦略 2012-2020）
- 2008（平成 20）年に生物多様性基本法を公布・施行
 - ⇒地方自治体に、生物多様性地域戦略の策定を求めている（努力義務）
- 2010（平成 22）年に名古屋で開催された COP-10 で生物多様性保全への関心が高まる

京都市の動き

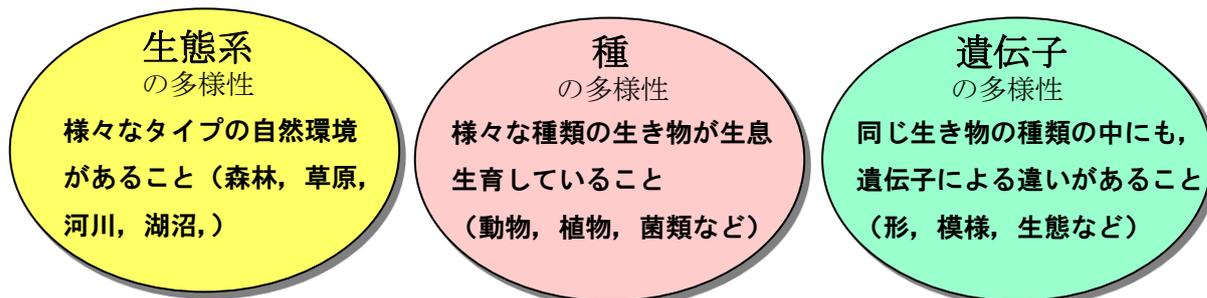
- 2011（平成 23）年に京都市基本計画「はばたけ未来へ！ 京プラン」を策定
 - ⇒「京都の自然環境を後世に伝えていくため、京都の地域特性を考慮した生物多様性の保全に向けた取組を進めていく」ことを謳う
- 2012（平成 24）年に「京都市の生物多様性保全の在り方」を検討するため、環境審議会に生物多様性保全検討部会を設置し、地域戦略の策定を進める

図 京都市生物多様性プラン（仮称）策定の経緯

第2章 生物多様性とは

2.1 生物多様性とは

地球上には、動植物や昆虫、微生物など、170万種以上の生き物が生息していることが確認されており、これに未知のものを加えると約3,000万種にも上るといわれています。生物多様性とは、このような生き物の**種の多様性**に加え、その生き物が住む**生態系**（環境）と**遺伝子**の多様性があり、「すべての生物の間に違いがあること」と定義されています。



コラム 生物多様性ってなに？

生物多様性とは、「生きものたちの豊かな個性とつながりのこと¹」です。例えば、メダカやドジョウ、アマガエルのように、生き物の違いを「種」で見たときの多様性です。生き物は、お互いに協力したり競争したりしながら、「仲よく生きられる²」ように少しずつ数を増やしてきました。仲よく生きるというのは、ヘビがカエルを食べるようなことも含みます。ヘビはカエルを食べますが、「仲よく生きられる」関係ができているとき、ヘビはカエルがいなくなるまで全部食べたりはしません。そんなことをするとヘビも餌であるカエルがなくなって生きていくことができなくなるからです。今、多くの生きものが一緒に暮らしているのは、こういう「仲よく生きられる」関係をすべての生きものが作り出してきた結果と言えます。

「種」をより詳しく見てみると、同じ種（例えば「人」）でも、ひとりひとり体格や性格が異なっていることがわかります。このような「違い」は「遺伝子」によってもたらされているのです。逆に、いろいろな「種」が集まって暮らしている環境（例えば「森」）を大きく見てみると、同じ森でも「川のそばにある森」「町中にある森」「山奥の森」などいろいろな種類があることがわかります。そしてそれぞれに住んでいる「種」の組み合わせは場所によって異なります。このように、いろいろな種が集まって暮らしている環境のことを「生態系」と呼んでいます。つまり、多様な「遺伝子」が多様な「種」を産み、多様な「種」が多様な「生態系」を作っているのです。

¹ 環境省・自然環境局・自然環境計画課・生物多様性施策推進室ホームページより引用「生物多様性 Biodiversity」(<http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/about.html>)

² 岩槻邦男=語り, Hideki Inoue・Kentaro Matsui=取材・文：生物多様性 Q&A, ソトコト 2009年11月号, pp. 46-47

2.2 生物多様性の恵み

この地球とそれを支える生物多様性は、2.1 で説明したとおり、長い歴史の中で、人を含む様々な生きものの関わり合いの中で作られた、かけがえのないものです。私たち日本人も、日本の自然の中で、他の生きものと関わり合うことで、日本独自の文化を作り上げてきました。

私たちの生活を通して、周りの自然や生きもの（生物多様性）を見つめ直してみると、私たちが生物多様性からいろいろな恩恵を受けていることがわかります。この恩恵のことを「生物多様性の恵み」と呼んでいます。

多様な生態系、多様な種、多様な遺伝子が作り出す「生物多様性の恵み」のおかげで、私たち人間は日々の生活や企業活動などを続けることができているのですが、普段の生活の中で意識することは、ほとんどありません。

このように多岐にわたる生物多様性の恵みを、わかりやすく説明するために作られたのが「生態系サービス」という考え方で、国連ではこれを4つに分類しています。下の表にその4つのサービスと、これに対応する具体的な「生物多様性の恵み」をまとめてみました。

表 4つの生態系サービス

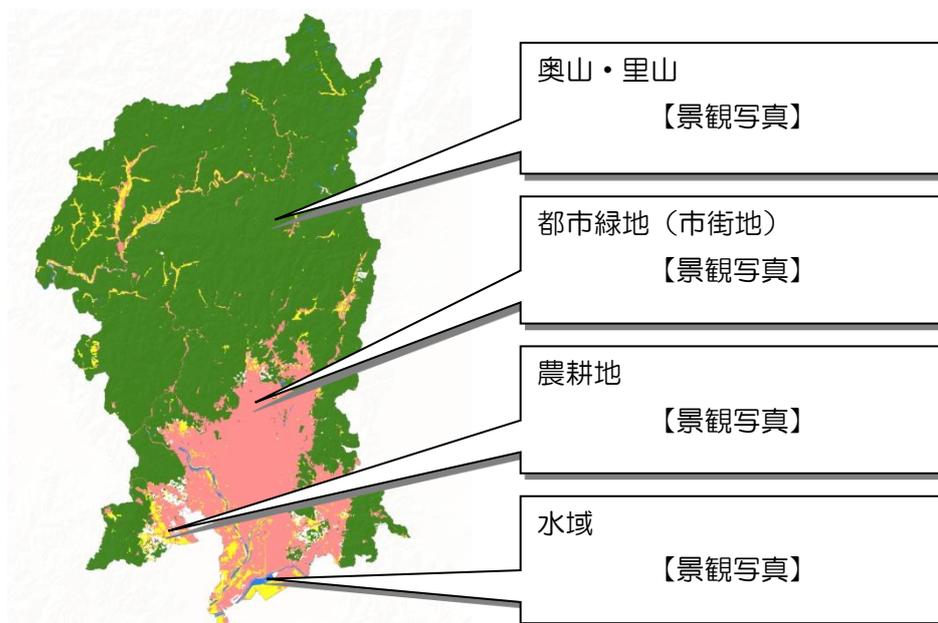
生態系サービス	生物多様性の恵みの具体例
供給サービス (人に必要な物を与える)	<ul style="list-style-type: none"> • 食材の提供：肉・野菜・米など • 衣服の材料の提供：繊維・皮革など • 木材の提供：住む家、木質燃料など
調整サービス (人が安心して暮らせる環境を作る)	<ul style="list-style-type: none"> • 水質浄化：土が水をろ過し浄化 • 洪水調節：森が雨水を吸収して少しずつ流れたことで洪水を防止 • 気候の調整：森林が二酸化炭素を固定することで、気温の上昇を抑制
文化的サービス (人の心に豊かさを与えてくれる)	<ul style="list-style-type: none"> • 伝統的な祭り等で利用 • レクリエーションの場の提供：森林浴など • 芸術：美しい模様、色など
基盤サービス (生きもののすみか・環境)	<ul style="list-style-type: none"> • 土壌形成 • 酸素の供給 • 生息場所、生育環境の提供

※3.3 では京都市における「生態系サービス」の現状と課題について説明しています。

2.3 基本的事項 ※資料3で審議

(1) 位置付け

(2) 対象とする地域等



環境省自然環境保全基礎調査植生調査結果
1/25,000 植生図のデータをもとに作成

第3章 京都市の生物多様性の現状と課題

3.1 京都市の自然環境

京都市は、市街地の周囲を取り囲む三山の山々（東山、北山、西山）や鴨川、桂川に代表される山紫水明と称される豊かな自然に恵まれており、こうした自然環境が、生物多様性を支える礎となっています。

市域の主に北側に大きく広がる森林は、市域の約74%（約4分の3）を占めています。こうした森林は多くの生きもの（動物・植物）のすみかとして重要であり、京都市のような大都市には珍しくツキノワグマやニホンジカ、イノシシ、ニホンザルなどの生き物が生息しています。

また、北山杉の産地も、これらの森林であり、古くから京都市域はもちろん、広く関西一円への木材供給の拠点となっています。

京都の代表的な観光地である東山や嵐山といった地域では、森林の一部（自然の美しい風景）を庭園等の借景として楽しむことができます。

農地（水田・畑）は、いうまでもなく、耕作や野菜づくりを行う場所ですが、合わせて、この環境をすみかとする生きものが存在します。水田ではメダカやカエルなどが、畑では様々なチョウが生息します。

このように、京都市の農地は京野菜や米の生産地としての価値だけでなく、生きものにすみかを提供してきましたが、昭和49年以降、休耕田が増加するなど、その面積の減少が続いています。

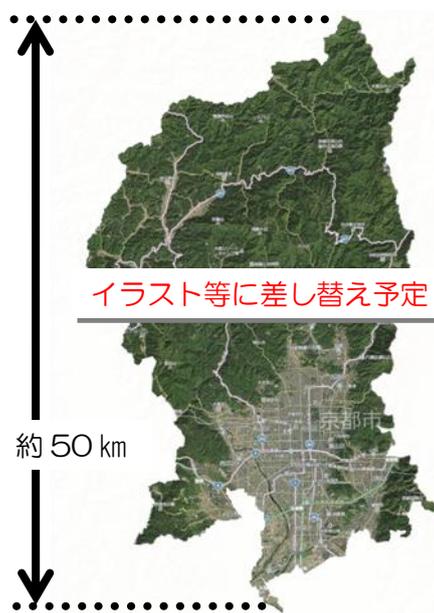


図 空から見た京都市の姿

写真 北山杉（磨き丸太）
あるいは
景勝地・借景の画

写真 農地の写真
あるいは
メダカやカエルなどの生物

また、多くの人活動する市街地にも、生きものにとって重要なすみかとなっている場所があります。例えば、古くから残る寺社や庭園等、人が管理し一定の自然度が維持されてきた環境を京都固有の動植物がすみかとして利用しています。市街地の中に散りばめられたように存在している寺社や庭園が、こうした生きものすみかとして欠かせない場所になっており、京都市らしい自然環境を形作る一つの要素となっています。

この他、京都御苑や梅小路公園のように広い面積を緑で覆われた公園は生きもの絶好のすみかとなっており、ここを拠点として市内に点在する緑地（家の庭や公園、街路樹など）でみられる生きもの供給源となっています。

京都市には、市内を流れる鴨川や桂川のほか、発電や水道水として利用される琵琶湖疏水など、身近に流れる水が豊富にあります。これらの水域は、魚など水の中で生息する生きものや、それを食べる鳥類などにすみかを提供しています。

京都盆地は、太古の湖の底に、長い年月をかけて土砂などが滞留することで作られたものであり、かつて湖であった名残を深泥池、神泉苑といった湿地や池に見ることができます（巨椋池もその名残のひとつですが、干拓され農地として利用されています）。ここでは、水を必要とする生きものを多く見ることができますが、とくに深泥池では希少な生き物が多く確認されており、京都市における重要な自然環境のひとつと言えます（深泥池生物群集は国の天然記念物に指定されています）。

ここまで見てきたように、京都市の自然環境は大きく分けると、「奥山・里山」「農地」「都市緑地（市街地）」「水域」の4つに分けることができます。3.3ではこれらの環境ごとに生物多様性の現状と課題についてご紹介します。

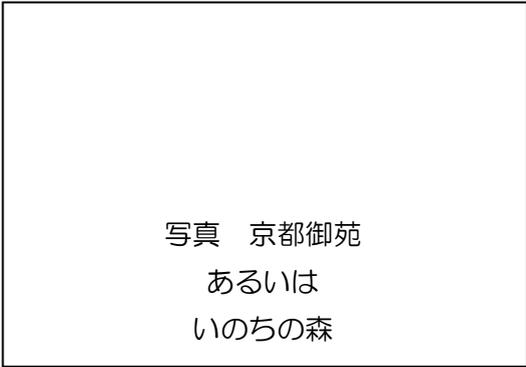


写真 京都御苑
あるいは
いのちの森

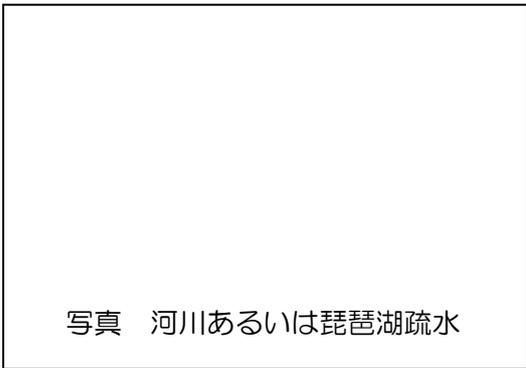


写真 河川あるいは琵琶湖疏水



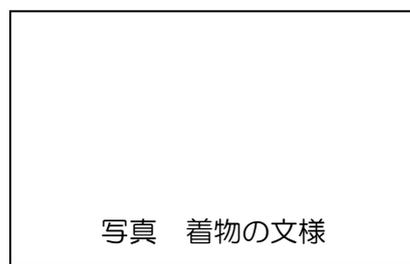
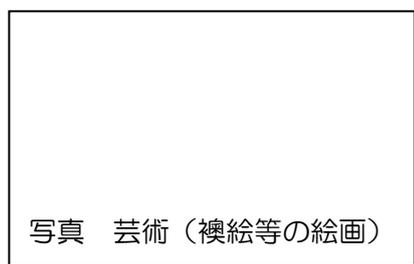
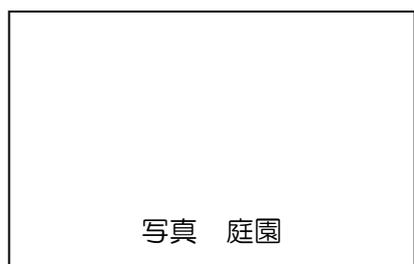
写真 深泥池

3.2 京都市の生物多様性（作成中）

3.3 京都市の伝統・文化と生物多様性の関わり

1200 年余の歴史を持つ京都市には、世界遺産を含む、数多くの文化財、社寺仏閣などの歴史・文化資源があります。これらの社寺の庭園に見られる長い年月が育んだ自然環境は生物多様性の保全上とても重要だということがわかっています。

市民が支えてきた祭りや伝統行事、あるいは華道、茶道や友禅なども京都市の緑や地下水といった生物多様性の恵みを利用しています。さらに、聖護院カブ、九条葱、桂瓜、賀茂ナス、スグキなどの京野菜、あるいは地下水を利用した豆腐や酒造なども市民生活に密着した生物多様性の恵みの代表的な例と言えます。また、視点を変えれば着物の花鳥風月の文様や寺社の襖絵等に見られる絵画にも生物多様性の素地を見出すことができます。



上の写真に示した、「庭園」「祭り」「茶道・華道」「食」「着物の文様」「襖絵等の絵画」それぞれがどのように生物多様性とかかわりを持っているのかご紹介します。

(1) 庭園と生物多様性

<作成中>

(2) 祭りと生物多様性

ア 祇園祭

京都三大祭りの一つである祇園祭では、厄除けとして授与される粽の原材料としてチマキザサが使われています。チマキザサは、本州、四国、九州の山地の林に生育する大型のササであり、京都市域では花背や八丁平で見ることができます。しかしながら、近年、増えすぎたシカの食害により若芽が十分に育っておらず、祇園祭を支えるチマキザサは絶滅の危機に瀕しています。

この対策として、シカの食害のない場所でササの若芽を育て、十分に大きくなってから、防鹿ネットを施した山に戻すことで、京都のチマキザサの再生をしようとする「チマキザサ再生プロジェクト³」が進められています。このプロジェクトではこの種の再生とともに、チマキザサの育成を都市部の「里親」に担っていただくことで、「山とマチをつなぐ絆」をつくることもめざしています。

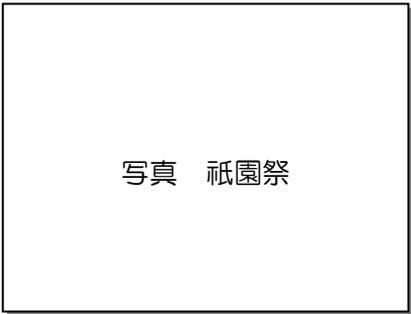


写真 祇園祭



写真 チマキザサ

イ 葵祭（賀茂祭）

祇園祭と同じく、京都三大祭りの1つである葵祭では、その名のとおり、行列の装束や乗物などにフタバアオイが飾られています。これはフタバアオイが上賀茂神社・下鴨神社の御神紋に使われているからです。フタバアオイは、福島県から九州までの薄暗い林床に生育する背の低い多年草で、ハート形の葉を2枚ずつつけることから、このように名づけられたといわれています。花は薄紅色で小さく目立ちません。

祭では毎年10,000枚程度のフタバアオイの葉が使用されています。かつては、林で比較的簡単に採集できたため、境内に自生するものだけで賄えたようですが、近年では林の減少等に伴う生育数の減少により、葵祭に必要な枚数の葉が集まらなくなっており、既に他府県から購入したのも使用している状況です。

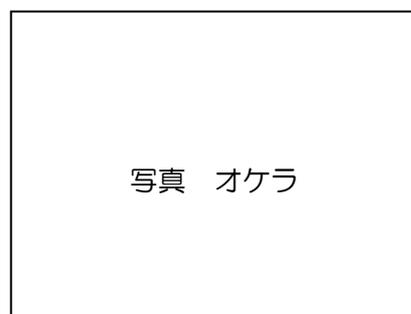
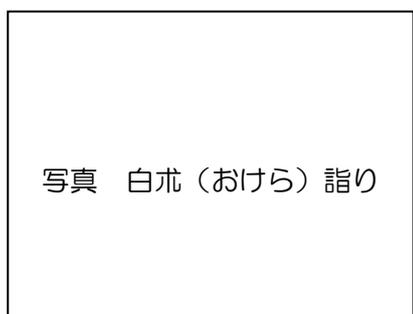
現在は、フタバアオイの里親制度などを実施することにより、「葵の森」の再生をめ

ざしたプロジェクトなどフタバアオイの保全を目的とした活動が行われています。



ウ 白朮（おけら）詣り

除夜の鐘を聞いた後、八坂神社へ詣でて『おけら火』をいただき、その火でお雑煮を作って無病息災を願うという京都ならではの風習です。ここで使用されるオケラ（白朮）は、本州から九州の草原や雑木林や林道のような明るい乾いた場所に生育するキク科の薬草であり、昔から厄除けとして用いられてきました。ところが、間伐等の人の手がはいらなくなったことにより、明るい林が暗い林になったことや土地の造成等で生育地がなくなったことから急激に減少しています。薬用採取も減少の要因の一つと言われています。



エ 五山送り火

五山送り火の燃料として使われるのはアカマツです。アカマツは北海道から九州まで尾根などの乾燥した明るい土地に生育します。アカマツ林はマツタケ山としても利用されてきたほか、東山界隈の庭園が東山のアカマツ林を借景として利用するなど、送り火以外にも京都の文化と深く結びついています。

現在は、山に人の手が入らなくなったことから（多くの木が生育し）、暗い林になりアカマツが減ってきていることに加えて、マツノザイセンチュウによる枯死も多く、送り火に使用する材が京都市だけでは賅いきれなくなっています。

このアカマツを守る活動として、NPO 大文字保存会が中心となりアカマツの植栽と林の整備を行っています。

写真 五山送り火

写真 アカマツ林

オ 鞍馬の火祭

鞍馬の火祭は、左京区鞍馬にある由岐神社の例祭の一つです。集落のあちこちで焚かれたかがり火の中を、氏子が松明を持って練り歩いて神社山門を目指すお祭りで京都三大奇祭の一つです。この松明の原材料がコバノミツバツツジです。コバノミツバツツジはアカマツ林などの明るい林に生育していますが、間伐をしなくなったことから林は暗くなり、コバノミツバツツジが生育できない環境となってきたと言われ、生育数が減少しています。

写真 鞍馬の火祭

写真 コバノミツバツツジ

(3) 茶道・華道と生物多様性

<作成中>

(4) 食と生物多様性

ア 京野菜

京都は、地理的に海から遠いことから魚介類の入手が難しく、その代わりとして多くの社寺で精進料理が発達し、その材料となる味わい深い「京野菜」が地元で育成され続けてきました。また、これらの野菜は、京料理の素材としても使われ、親しまれてきました。

しかしながら、現在では、これら「京野菜」の栽培や収穫には手間がかかることなどから農家が栽培を敬遠し、一部の品種が絶滅しているといわれています。

○京豆腐 <作成中>

○酒造 <作成中>

○香料

フジバカマ（藤袴）は、キク科の多年草で秋の七草の一つです。乾燥させたフジバカマは香料としても用いられ、古代から衣服、髪などにしのばせる香料や生薬として利用されてきました。これについては『源氏物語』にも記述があります。

花は藤色がかかった白で、河川や水田付近の明るい水辺に咲く山野草として親しまれてきましたが、現在、河川改修などによる環境の変化で原種の自生地が激減し、絶滅が心配されています（街中で見かけるフジバカマは園芸種です）。

このため、「守ろう！藤袴プロジェクト」などのフジバカマを守る活動がはじめられており、同プロジェクトではフジバカマの自生種を育成し、市内の各地に鉢を預けるなどの普及啓発活動が進められています。

(5) 芸術<作成中>

○着物の文様

○絵画

3.4 京都市の地域区分の現状と課題

3.1 で示した京都市の自然環境の特徴に基づき、地域区分を行いました。それぞれの区分の場所は次のとおりです。



図 京都市の自然環境の地域区分

ここでは、地域区分ごとに生物多様性の現状と課題を取り上げます。

(1) 奥山・里山

第2章で説明した生物多様性の恵み(生態系サービス)に沿って考えてみると、森林は供給サービスとして木材、食材、水などを提供してくれています。京都市の木材と言えば北山杉、森の恵みの食材と言えば京松茸などがあります。また、森があることで雨水を一時的に蓄えて、継続的に水を川や池に供給することができます。

次に調整サービスとしては、雨水が山を削って土砂崩れ等にならないようにして災害を防止したり、供給サービスで出てきた水を森林内の土壌できれいに濾過したりしてくれています。また野生生物が人の住む街に出てこないようにする緩衝帯⁴としての機能があります。

文化サービスでは、森林で育つチマキザサやフタバアオイが、それぞれ京都の伝統的なお祭りである祇園祭と葵祭で欠くことのできない祭祀品を提供しているほか、

森林そのものが市街地の庭園の借景としてまた、市民のレクリエーションの場として利用されています。

最後の基盤サービスでは、森林そのものが成り立つ基盤としての土壌の形成に役立つほか、二酸化炭素を吸収し、酸素を大気中に供給しています。

このようなサービスを提供している京都市の森林は、近年、利用が減ったこととそれに伴って下草刈りなどの管理が行き届かなくなったこと、また人がいなくなったことと関連して、木や草を食べる大型のほ乳類(ニホンジカなど)が増加したことなどによって、チマキザサやフタバアオイの減少、松枯れ・ナラ枯れの発生など、これらのサービスを十分に発揮することが難しくなっています。

写真 北山杉

イラスト 水源浄化

写真 粽(祇園祭)

イラスト 酸素の供給

⁴ ここでいう緩衝帯とは、隠れる場所の少ない里山は野生動物が移動しにくい場所であるので、主な生息地である森林と人が住む市街地の間に里山があることで、野生動物が簡単に市街地に下りてくることを防ぐ役割のことを言います。

写真 良好な森林

写真 荒廃した森林

(2) 農耕地

農耕地の供給サービスは、私たちの食べる米、野菜ですが、中でも京野菜は京料理の素材として文化サービスも提供していると言えます。

また調整サービスとして、森林と市街地の間にある農耕地は、様々な生物の生息場として重要な役割を担うほか、水田は水を貯めることで洪水調整の機能も果たしています。

京料理の素材としての文化サービスのほか、おけら詣りのオケラなど、古くから私たちが親しんできた草地の野花も文化サービスのひとつと言えます。

最後の基盤サービスとしては、森林と連続した山裾に広がる農耕地は山と平地の両方を使う生きもののすみかを提供しています。

ところが、農耕地が土地利用の改変（宅地化）などによって減少することで、分断化・小面積化が進み、生物の生息・生育環境として適さない環境へと変わりつつあります。また、農耕地における水の管理は、水の調整サービスとして機能していましたが、農地の放棄や市街地化、あるいは外来種の増加によりサービスの低下が懸念されています。

写真 京野菜

イラスト 緩衝帯

写真 粽（祇園祭）

イラスト 酸素の供給

(3) 都市緑地（市街地）

寺社の庭園を含む都市の緑地は、生きものの生息場所となるような環境が少ない市街地で、数少ない生息場所を提供しています。ここでは主に緑地のサービスを取り上げます。

供給サービスとしては緑が存在することで人が受ける癒しの効果があります。

市街地ではしばしば舗装路が多いことや冷暖房の排熱などの影響でヒートアイランド現象⁵が見られますが、緑地や特に非舗装の地面はこれを和らげるクールアイランド効果を発揮しており、これは調整サービスのひとつと言えます。

京都市内に多くみられる町家や寺社の庭は、日常的に市民が文化的な価値を認知する機会を提供しているほか、伝統行事のための場として利用される、散策や子供の遊び場の提供などは、文化サービスの例と言えます。

最後に、基盤サービスとしては、優れた水辺デザイン等による小さく多様な環境や、継続的に管理の手が入ることでコケ・シダ類が生育できる環境を作りだしています。

しかしながら、ここでもこれらのサービスの低下が進んでおり、たとえば、コインパーキングへの転用による舗装面の増加等により気候の調節機能が低下、あるいは古い街並みが減少することで社寺や庭園を含めたまちとしての景観の単調化、さらに温暖化による乾燥や使用される樹種が経済性を重視したものとなったことで起きる種の多様性の減少、あるいは侵略的外来生物⁶の増加、といった課題が指摘されています。

イラスト 癒し効果

イラスト クールアイランド

写真 町屋の庭

写真 コケ・シダ類

イラスト 土地利用の変遷

⁵ ヒートアイランド現象とは主に都市部において、地面の大部分がアスファルトやコンクリートで覆われることで水分の蒸発による気温の低下が妨げられ、気温が高くなることを指します。周り（郊外）との気温と比較した等温線を書くと都市中心部を核とした縞状の等温線が引かれ、島のように見えることからヒートアイランドという名前が付けられました。

⁶ 侵略的外来生物とは、外来生物の中でも特に、そこにもともと住んでいた生きものやその生息場所に大きな影響を及ぼす生物のことを言います。

(4) 水域

京都市には、市街地の中心を流れる鴨川、桂川、宇治川の三川、琵琶湖疏水に流れる水域があり、深泥池、神泉苑をはじめ社寺の庭園などにため池のように流れのない水域があります。

川には京料理に必要な淡水魚が生息しており、私たちはこれを供給サービスとして利用しています。

市街地の小さな水路や、点在する小さな池は雨水を一時的にためて洪水を調整する調整サービスを提供しています。

文化サービスとしては、豊富に存在する地下水、湧水が名水として市民・事業者利用されてきました。

疎水を利用した庭園の池は生息場所が少ない市街地で魚類に貴重な生息環境という基盤サービスを提供しています。場所を生きものに提供していません。

ところが、こういった水域、あるいはそこで取れる淡水魚の利用が減ったことや、淡水魚そのものが外来種の影響で減ったこと、水を一時的にためておける舗装していない地面などが減ったことで、これらのサービスが低下していると言われています。

写真 川魚料理

写真 湧水

写真 町家の庭

写真 コケ・シダ類

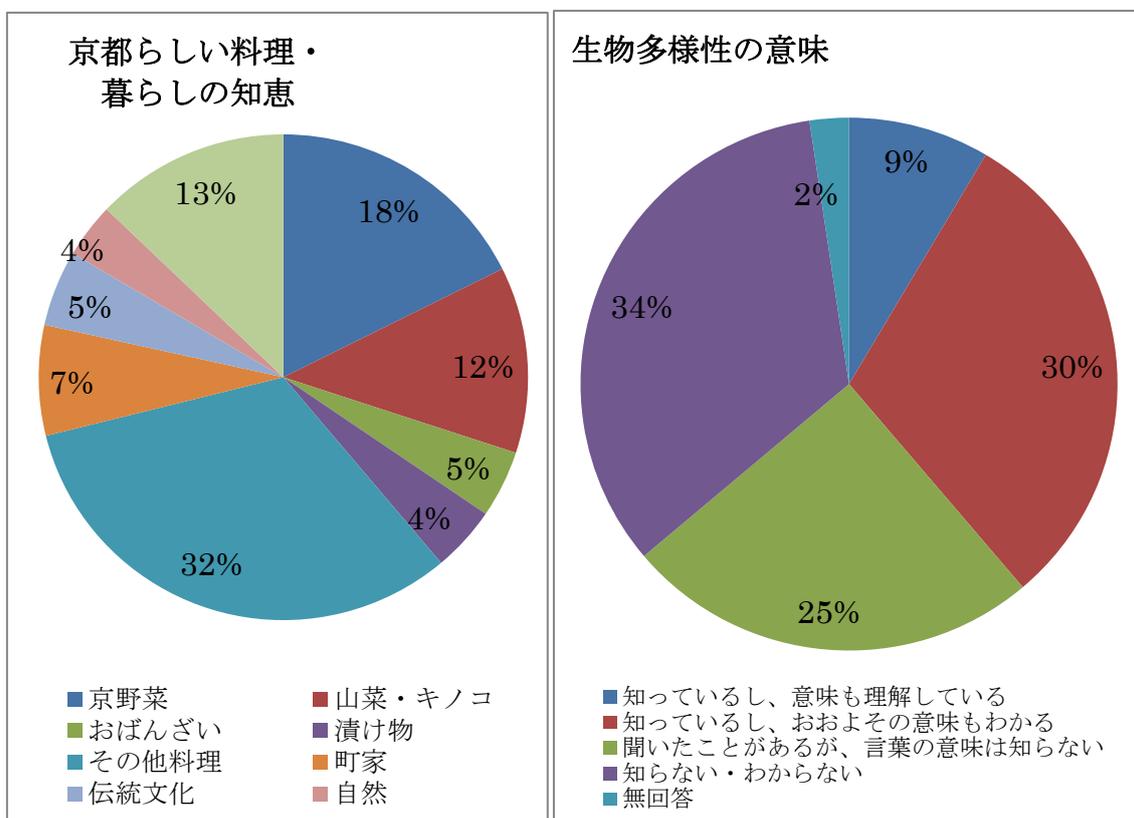
3.5 市民・事業者の意識に見る現状と課題

ここまで第3章では、京都市の自然環境や伝統文化が生物多様性とどのように関係しているのか、また、その生物多様性が今どのような課題を抱えているのかということについて見てきました。

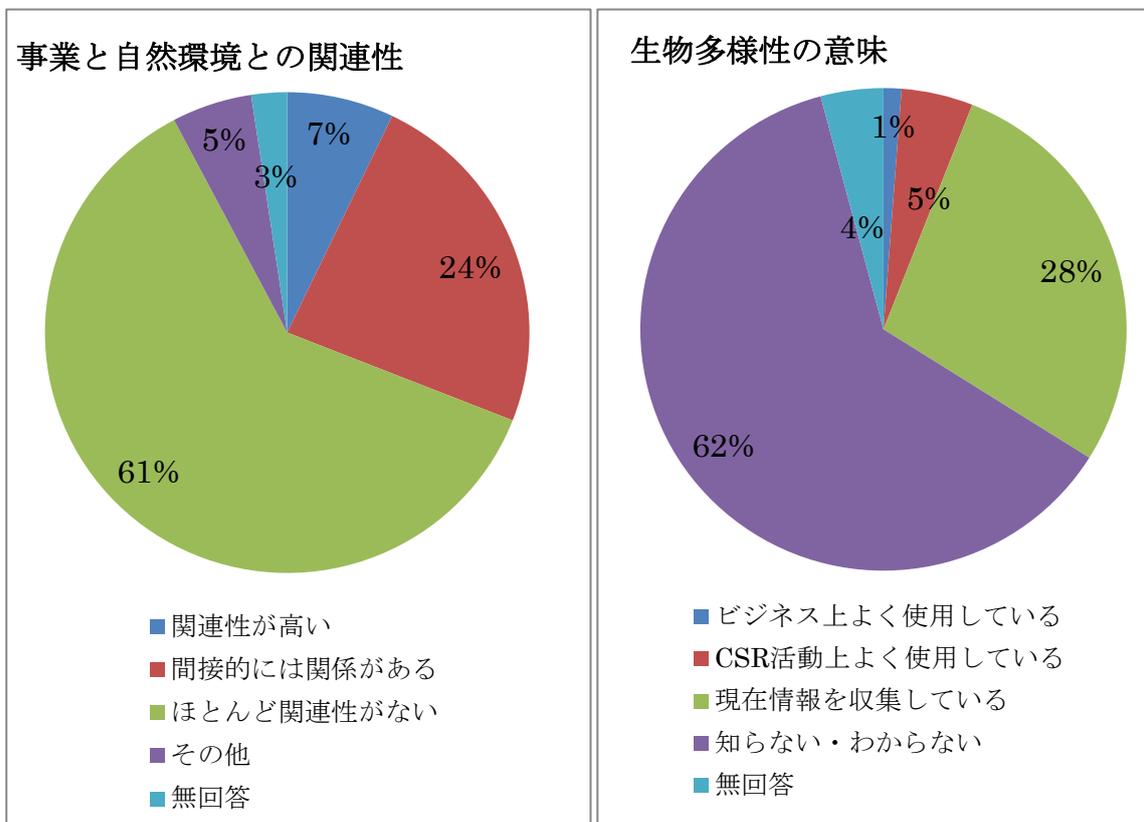
これらの課題を解決するためには、各々の主体ができることは何かを考え、行動することが必要です。そこで、生物多様性や自然環境に対して市民や事業者がどのような意識を持っているのかを調べるため、京都市では平成23年度にアンケート調査⁷を実施しました。その結果は以下のとおりです。

【生物多様性の認知度】

市民の多くは、生きもの（動植物）と京都の文化・歴史の結びつきを強く意識していますが、生物多様性に関する認知度は低いことがわかりました（約4割）。

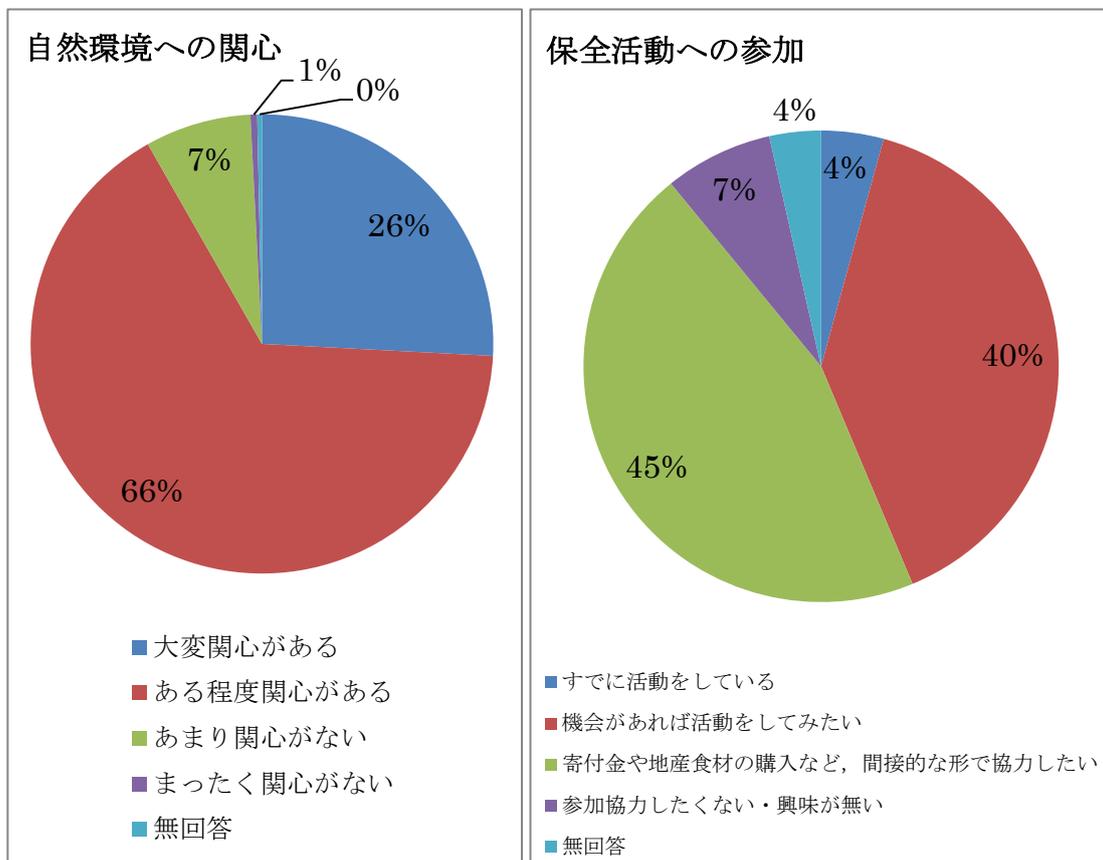


事業者の6割以上が事業と京都市の自然環境はほとんど関係がないと考えており、生物多様性という言葉を知らない事業者も6割強であることがわかりました。

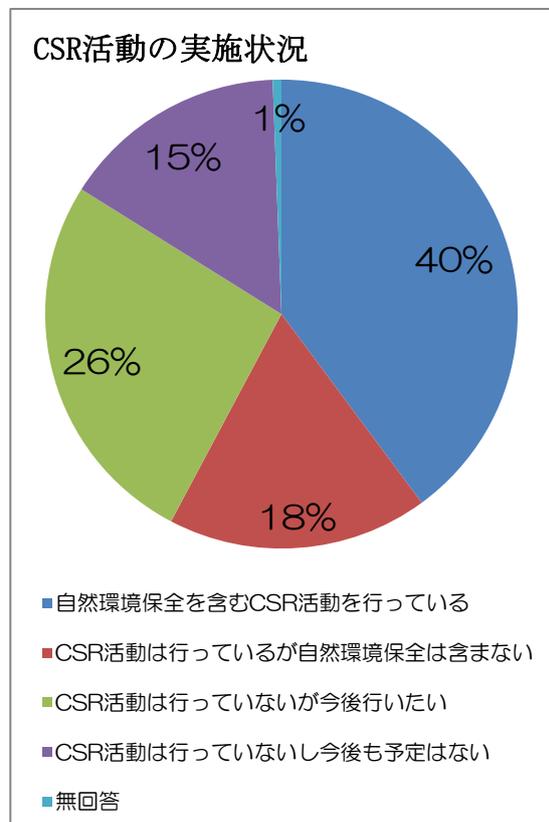
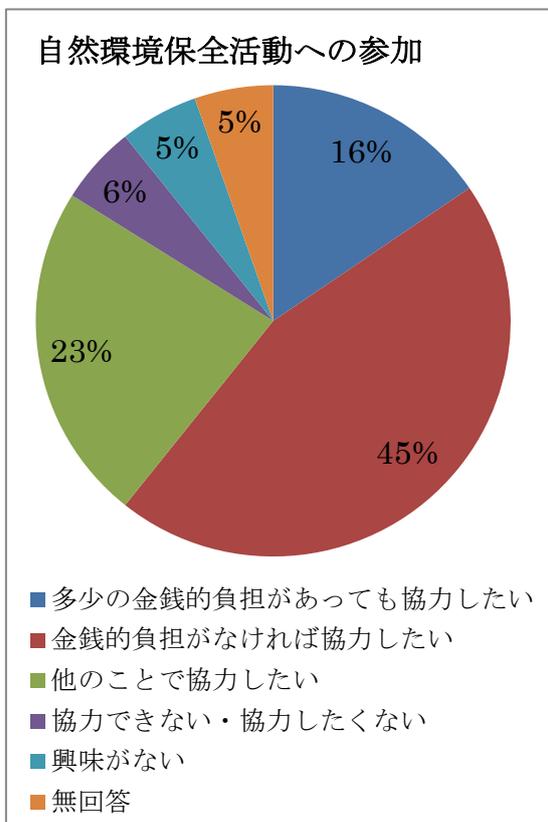


【生物多様性や自然環境への関心・保全活動への参加】

市民の約 9 割が自然環境に対する関心を持ち、何らかの保全活動に関わりたいと思っていますが、実際に活動している人は 4%に過ぎませんでした。



事業者の約6割がCSR活動の一環として、自然環境の保全活動への参加意欲を持っているものの、実際に活動している事業者は約4割でした。



3.6 本市自然環境に係る現状と課題のまとめ

3.1 から 3.5 で記した本市生物多様性の現状と課題についてまとめると以下のとおりです。

(1) 生きものの減少、生息場所の減少

京都市では土地利用の改変（森や農地を住宅地にしたりすること）等の環境の変化によって生きものの生息場所が減少し、その結果、生きものの数も減ってきています。

里山の減少等により、市街地にシカ等の鳥獣動物が出現しやすくなり、こうした動物が農作物等に被害（食害）を及ぼしています。また、伝統的な祭祀に欠かせないチマキザサやフタバアオイ等の固有生物が減少し、伝統的な文化の継承が危ぶまれています。

(2) 人と自然との関わりの変化と生物多様性の恵みの低下

昔から人が手を入れることで維持されてきた森林（里山）の利用が、ライフスタイルの変化等の理由で減少してきたことで、管理が行き届かなくなった森の荒廃が進んでいます。松枯れ・ナラ枯れ等森林の荒廃は、景観（借景）の劣化をまねくとともに、水源涵養、森林による土砂災害防止機能を低下させ、水害を生じやすくさせています。

(3) 自然環境保全に係る情報ネットワークや活動プログラムの不足

市民、事業者を対象としたアンケート（平成 23 年度実施）において、市民の意識等については、以下のような結果でした。

ア 市民の多くは、生きもの（動植物）と京都の文化・歴史の結びつきを強く意識しているものの、生物多様性に関する認知度は低い（約 4 割）。

イ 市民の約 9 割が自然環境に対する関心を持ち、何らかの保全活動に関わりたいと思っているものの、実際に活動している者は 4% に過ぎない。

ウ 事業者の約 6 割が CSR 活動の一環として、自然環境の保全活動への参加意欲を持つものの、実際に活動している事業者は約 4 割にとどまっている。

これらのことから、市民の意識向上に向け、あらゆる機会を活用した普及啓発や、事業者が生物多様性保全に取り組むことを促すしくみづくりなどを進める必要があります。